

# 国営土地改良事業 事後評価

## 現地調査概要

北海道開発局農業水産部

## 地区別現地調査概要 目 次

### (国営かんがい排水事業)

はまなか地区	.....	1
い <sup>く</sup> た <sup>は</sup> ら <sup>ら</sup> 生田原地区	.....	3
ほ <sup>ろ</sup> し <sup>ん</sup> 幌進地区	.....	5

### (直轄明渠排水事業)

ぎ <sup>ふ</sup> 岐阜地区	.....	7
------------------------	-------	---

### (国営総合農地防災事業)

し <sup>も</sup> う <sup>ら</sup> ほ <sup>ろ</sup> 下浦幌地区	.....	9
わ <sup>っ</sup> か <sup>な</sup> い <sup>ち</sup> ゅ <sup>う</sup> ぶ <sup>ぶ</sup> 稚内中部地区	.....	11

平成30年度 事後評価「はまなか地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要

日時：平成30年6月12日（火） 13：40～15：10

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員  
（地元関係団体等） 農業者、浜中町、浜中町農業協同組合  
（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】排水路、遊水池、地区内肥培施設、地区内酪農施設

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・希釈・曝気したスラリー（家畜の排せつしたふんと尿の混合物で水分率が87%以上のもの）を散布して、畑の地力がついて収量が上がった。また、今までの堆肥の処理より効率的な作業体系になった。
- ・事業により堆肥からスラリーに変わり、カリの肥効が高まったため、ホクレン、農業改良普及センターと農協でカリを減らした配合肥料を製造している。肥料の散布量は管内で比較して3割くらい少なく、生産コストの削減が図られている。
- ・事業により牧草の収量も増えているが、毎年鹿の食害が大きい。鹿に最もおいしい新播草地が狙われる。単に収量が確保できないことよりも必要な栄養を確保できないことが一番の問題。駆除しているが、地区面積が13,000haであり対策が難しい。
- ・農家の経営規模が大きくなり、家畜ふん尿による汚染等により、20年前は死の川といっていたくらい、臭いもひどく水の色も汚れていた。しかし、かんがい排水事業だけでなく、生活排水を浄化する施設の整備や河川沿いの植樹活動など色んな取り組みも行ってきた結果、川がきれいになった。自然が帰ってきたと感じている。漁協からも問題ないと言われている。
- ・これからも施設を使っていくためには、何種類もの高額な機械があり、機械の更新に自力で対応できない場合もある。施設の整備から10年経っており、施設が使えなく

なった時は大変な問題になるので次のステップを考えていく必要がある。

- ・施設を使えなくなると経営が成り立たなくなり、環境へも負荷がかかると思う。
- ・嫌気性発酵の施設については、製造したバイオガスの供給先の確保、送電施設の整備の問題など、総合的に考えていく必要があり、農家個人でできるものではない。資源はあるため、後継者の世代は次のステップとして考えてもよいと思う。
- ・遊水池など排水施設の維持管理について、予算が少ない中で周辺の伐木や土砂上げ等を行っているが、施設のもつ水質浄化機能を効果的に発揮させるために必要な木は残す等、適切な管理の仕方を考えていきたい。
- ・植えた木の管理について、枯れたところは土地に適した木を補植したり、はまなか農地・水保全協議会で下草刈りを行っている。
- ・農家に必要な量の牧草は100%生産しており、余った牧草は十勝へ移出している。

以上

**平成30年度 事後評価「生田原地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要**

日時：平成30年5月23日（水） 13：15～14：45

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員  
（地元関係団体等） 農業者、遠軽町、えんゆう農業協同組合、生田原地区水管理組合  
（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】 取水施設、貯水池、地区内圃場

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・事業実施前は、デントコーンに除草剤を散布するだけでも莫大な労力がかかっていたが、事業によって地区内に多目的給水栓が設置されたため、十分に活用している。
- ・地区の端から端まで牧草地が分散しているため、広範囲にどこにでも使える多目的給水栓が非常に有効となっている。
- ・高収益作物としてハウスアスパラを導入したが、以前は沢水を利用してかん水しており、手間が大変だった。給水栓が整備されてからはすぐに水が届くようになった。
- ・スプレイヤーに防除用水を汲む際、管がよく詰まり苦労していたが、今は労力的にすごく楽になった。
- ・ここ2～3年は作物を植えてすぐに雨が降りタイミングが良かったため、リールマシンを使ってないが、前に使用したときは、作物の初期生育が良くなった。
- ・経営面積が大きく地区内に分散しているため、スラリーは尿溜め周辺の農地に散布している。堆肥は毎年全面積に少しずつ散布することは作業効率上できないため、3年に1回のペースで散布している。

- ・かんがい用水は、ふん尿の臭いをできるだけ抑えることと、肥料成分が尿だけでは高すぎることから、適度な濃度に薄めるために使っている。スラリーを完熟させるには莫大なコストがかかる。
- ・今後の施設の老朽化対策について、水管理組合の繰越剰余金の範囲で修繕していく考えだが、高額を要する場合は町と協議する必要があると考えている。
- ・認証制度や基準について、ISOやJIS基準や他の農水省の基準など様々な基準があり、国を挙げて推進しないと認証取得は進まないと思う。
- ・野菜の作付面積は増えてきており定着しているが、農家戸数が減っているため労働力が足りない。ブロッコリーやアスパラのさらなる作付拡大は難しい。
- ・地域から、各圃場に多目的給水栓が欲しいという要望がある。

以上

平成30年度 事後評価「幌進地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要

日時：平成30年5月14日（月） 15：35～16：50

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、岡村委員、中原委員、波多野委員、森委員

（地元関係団体等） 農業者、幌延町、幌延町農業協同組合

（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】肥培施設、TMRセンター

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・事業実施前はふん尿の処理に苦慮していたが、事業によりふん尿処理施設が出来て作業効率が上がった。地域全体でも、農家個々の生産性が向上している。
- ・事業実施前は、野ざらしのふん尿が川に流れこむ事もあり困っていたが、事業実施後は無くなった。
- ・事業実施前はふん尿由来の汚濁のため河川の水質が悪く、漁協からクレームが来ていたが、今はなくなった。
- ・曝気していないふん尿は臭いがきつかったが、事業により曝気が可能となり臭いが改善された。
- ・化学肥料はスラリーだけでは不足するため必要であるが、以前に比べ3割程度減った。スラリーは主にサイレージにする草地へ蒔き、堆肥は更新する畑に蒔いている。
- ・町内の約半分はかんがい用水施設が整備されていない。未整備地域の農家からも整備要望があるものの、財政的な問題もあり厳しい。
- ・この事業によりふん尿処理の問題が解決し、次のステップとして経営規模の拡大、生産拡大への投資を行うことができた。

- ・ 事業により、地域の環境がよくなったし、生産性が上がり農家の収入も増えている。
- ・ 粗飼料自給率は 100%だと思う。濃厚飼料を含む飼料自給率の向上は、粗飼料の作付拡大や品質向上も必要で有り、現在の作付面積を考えると非常に難しい。

以上

**平成30年度 事後評価「岐阜地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要**

日時：平成30年5月22日（火） 13：40～15：10

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員

（地元関係団体等） 農業者、北見市、北見市議会、常呂町排水愛護組合、  
常呂農業協同組合

（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】排水機場、排水路、たまねぎ出荷施設

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・地域は低平地のため、昭和46年に就農した当時から排水対策が主たる課題であった。事業実施前は排水路から溢水して湛水被害が度々あったが、排水機場が完成し、速やかな排水が可能となり被害を免れるようになった。
- ・激甚災害指定を受けたH28年の台風に伴う大雨の際は、排水能力を上回る降水量であり、湛水被害が発生したが、水が引く時間が短くなったことで、作物の品質を損なうことをいくらかでも免れ感謝している。
- ・事業完了後5年経過したが、毎年幾度も排水機場を稼働しており、排水効果は非常に大きい。農家も排水機場の能力に期待しているところが大きく、排水対策も変わってきている様に感じる。
- ・昔から水との戦いであり、親は農業を「子供に継がせたくない」と言っていたが、今は安心して営農できるようになった。最近は脱サラして継いでもいいという声もあるほどで、毎年4～5戸は跡継ぎの希望者が出ている。

- ・これまで2～3年に1回は農地が水没し作物が流されてしまい、しばらく作っていない時期もあったが、排水機場が完成してからは安心して営農を再開できた。これから若い人たちに農業を継いでもらうのに不可欠なものだと思う。
- ・耕作地の7～8割は泥炭土であるが、今まで3回ほど暗渠排水、明渠排水等の基盤整備を進めてきたことで、今では地盤沈下が収束している。最近は保水性も水捌けも良く、作業性や収量が向上し、たまねぎを生産できる1等地と呼べるまで良くなった。
- ・高収益作物の栽培はリスクがあるので、排水対策が根底・土台としてしっかりしていないと出来ない。
- ・ところピンクにんにくは元々手間のかかる作物だったが、排水性、気象条件などが良くなったことで、近年、再び作付が出来る様になった。
- ・排水が良くなったことで、雑草が減った。また収穫の際、降雨後2～3日は入れなかったほ場にすぐ入れる様になり、作業が非常に楽になったことで、女性部がいろんな場面に顔を出せる様になった。
- ・基盤整備は畑に「投資する」という考えであり、土台となる畑の整備に付随して農作業の機械化、施設整備等を一体的に進めたことで「常呂ブランド」を確立できた。
- ・排水機場の管理は市職員が行っており、長雨の場合、他の仕事と掛け持ちせざるを得ず負担になっている。管理の体制や方法などについて、現状のあり方を含めて検討していきたいと思っている。
- ・排水機場が出来て、排水性が上がり非常に良かったが、この地帯は春の雪解け水で一杯になり、越冬ニンニクや麦が停滞水でやられることがある。春先に稼働が出来る様になれば被害を更に抑えることが出来てありがたいと思っている。

以上

平成30年度 事後評価「下浦幌地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要

日時：平成30年5月30日（水） 13：00～14：10

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員  
（地元関係団体等） 農業者、浦幌町、浦幌町農業協同組合  
（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】 地区内圃場、地区内展望、排水機場

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・事業前は、大雨が降ると畑の冠水や湿害に悩まされ、根腐れ病等が生じる状況で、でん粉原料用ばれいしょ、てんさい、小麦の3作物を30haくらいで輪作していたが、事業完了後は、水はけが良くなり色々な作物が作れるようになった。畑作物としては、大豆、小豆、カルビーと契約した加工用ばれいしょ、野菜類としては、大根、かぼちゃを作り、今では85haくらい耕作している。
- ・事業前は、雨が降ると大根畑の畦を覆っているビニルフィルムが全部湛水してしまい、いいものが取れなかったが、事業後は、Yes!Cleanを取得して、減農薬で有機肥料を使った付加価値のあるだいこんを作っている。
- ・排水機場は2人で管理しており、平成28年8月の台風時には、24時間体制で4日間連続、交代制で行った。冠水はしたが、2つのポンプで14トン/secの内水を川へくみ上げた結果、いち早く畑から水を取り除くことが出来た。
- ・排水路は定期的に見回りし、毎年優先順位の高い排水路から計画的に床ざらいを行っている。
- ・排水機場の維持管理は、毎年点検し、ポンプの整備や消耗部品の交換を行っている。整備後10年経過し、通常の維持管理費に加えて何らかの補修や交換が必要であり、単年度だけに多くの維持補修費がかかることの無いよう、長寿命化を考えながら、計

画的に進めている。

- ・近年、エゾシカやタンチョウ、ガン等の鳥獣が増えており、いろいろな作物の被害がでている。鳥獣被害対策として、国などの補助制度を活用しているが、地区は川や海沿いの平坦な地域のため、銃による駆除が出来ず、電牧柵でも防ぐことが難しく、よい対策がなく苦慮している。
- ・事業のおかげで、今まで排水性が悪いため耕作されていなかった畑が耕作されるようになり、経営面積が拡大し、農業所得も増えた。
- ・事業前は50ha、100ha規模の農家はいなかったが、事業により畑が満遍なく使え、規模拡大が出来たのは、事業の効果が非常に大きかったと感じている。
- ・国際認証制度については、時代の流れなので取組は避けて通れないが、地域にあった認証項目の統一が必要で、行政や大学などが窓口となってやっていかなくてはならないと感じている。
- ・有機栽培野菜など、手間をかけてこだわった物に関してはそれなりの付加価値が付くが、十勝のような大規模畑作地帯では収益性を考えると取り入れるのが難しい。手間をかけることと収益性の問題が出てくると感じている。

以上

平成30年度 事後評価「稚内中部地区」国営事業評価技術検討会  
現地調査概要

日時：平成30年5月15日（水） 9：35～10：35

出席者：

（技術検討会） 長澤委員長、岡村委員、中原委員、波多野委員、森委員

（地元関係団体等） 農業者、稚内市、北宗谷農業協同組合

（事務局） 北海道開発局

概要：

【現地】排水路、地区内圃場

【意見交換会】

委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

- ・事業実施前は排水性が悪く牧草が湿性雑草に負けていたが、事業実施後は排水性がよくなったことで全部ではないが負けることがなくなった。
- ・置土や暗渠排水等により、大型ハーベスタ(20t)や大型ダンプ(11t)等の大型機械がほ場に入れるようになった。
- ・降雨時も水の引きが早くなったため、適期に刈り取りができるようになった。
- ・飼料が乾草飼料からサイレージに変化しており、刈り取り作業が適期に短期間でできるようになったことは、事業の効果である。
- ・受益者の9割が事業に満足している。ただし、1割が満足していない理由として、事業でできることは整地までで、土壌改良材や種子の費用は事業対象外であり、自己負担となるため、経営面積の大きい農家はかなりの費用が必要となるためと思われる。
- ・事業完了後6年が経過し、暗渠の埋設箇所を中心に沈下が早い。泥炭土壌の特性上沈下は避けられないと思っているが、あと10年はもって欲しい。

以上